

かがわ文化芸術祭2026参加公演

コンサート&演劇



沈黙を聴く

出演：劇団オムツかぶれ他

脚本演出：仙石桂子

美術：千田豊実

音楽：はたなか圭一・西浦弘美

(概要)さぬき市川田一二のシベリア抑留体験を孫の千田豊実の目を通して作られた作品。シベリアで亡くなった多くの仲間の想いを絵にして後世に残す事が自分の役目と七十歳を過ぎてから孫と一緒に絵を描き始めた人生の物語。



脚本演出：仙石桂子



美術：千田豊実

～シベリアの記憶のしらべ後世に 伝える平和への祈り～

2026年

10月25日(日)

場所：レクザムホール・小ホール

12時開場12時30分開演～15時30分終演予定

大人前売 ¥2500 当日券¥3000

学生前売 ¥1000 当日券¥2000

(小・中・高)

●コンサート はたなか圭一・西浦弘美(ヴァイオリン)

◆主催：高松市こどもに平和な明日を繋ぐ会
(お問い合わせは、大西まで ☎090-9016-6640)
◆助成：(公財)置県百年記念香川県文化芸術振興財団
◆後援：高松市・朝日新聞高松総局・産経新聞社
山陽新聞社・四国新聞社・毎日新聞高松支局
読売新聞高松総局・RSK 山陽放送・RNC 西日本放送
OHK 岡山放送・KSB 瀬戸内海放送・TSCテレビせとうち
KBN株式会社・CMSケーブルメディア四国
CVC中讃テレビ・FM香川・FM815
高松リビング新聞社・ナイスタウン出版
◆前売券発売所
レクザムホール・源内音楽ホール・香川県庁生協
朝日段ボールホール国分寺(高松国分寺ホール)
アイレックス・ユープラザうたづ・マリウエーブ
ハイスタッフホール





◆はたなか圭一

高松市出身シンガーソングライター／東京都小学校音楽科教員。

高松高校卒業後、横浜国立大学教育学部へ進学し、同大学院を修了。東京都公立小学校にて音楽専科教員として勤務しながら、兼業申請を経てミュージシャンとしての活動を開始。東京を拠点に全国各地で年間50本以上のライブを行い、地元香川でも定期的にイベントを開催している。ギター・ピアノの演奏技術と包み込む歌声に定評があり、タカラトミー商品「ハンドルドライバー」「トミカビーム」では公式ソングの制作・歌唱を担当。教育現場でも創作活動が評価され、勤務校の周年記念歌や卒業合唱曲を児童と共に制作。雑誌「教育音楽」(2022年12月号)では授業実践の特集が掲載された。「教科書に載る名曲を作る」ことを夢に、教育と音楽の両面で活動を続けている。



◆西浦弘美

大阪府出身。京都市立芸術大学音楽学部卒業。ヴァイオリンを高瀬乙慈、岩淵龍太郎、亀田美佐子、トーマス・クリスチャンの各氏に師事。卒業後、関西室内楽協会に所属し演奏活動をおこなう。その後、香川県に居を移し、中四国を中心に幅広く演奏活動をおこなっている。これまでに、ソロリサイタルを開催。クリシュナ・フルートアンサンブル、コレギウム・ムジクム高松、マンドリンアンサンブル・ソナチネと協奏曲を共演。2006年、ラ・レゾナンス・アンサンブルを結成。現在、瀬戸フィルハーモニー交響楽団楽団員、高松コンテンポラリーソロイスツ コンサートミストレス、ラ・レゾナンス・アンサンブル代表、トリオ ノア、デュオ ル・レーヴのメンバー。大阪芸術大学、高松第一高等学校音楽科講師を経て、後進の指導にも力を注いでいる

◆劇団オムツかぶれ

劇団オムツかぶれは、2019年に旗揚げされた演劇ユニットである。日常の会話、ユーモラスなダンス、インプロ、生演奏を自在に織り込みながら、ライブ感あふれる舞台を立ち上げてきた。赤ちゃんから老人まで、あらゆる世代の〈生きづらさ〉を見つめ、笑い痛み、切実さと可笑しみがせめぎ合う作品世界を描き出す。人間の不器用さや孤独、日常に潜む名づけがたい感情をすくい上げ、観る者の心に鮮やかな余韻を残す。地域に根ざした活動を重ねながら、多様な人びとに開かれた新たな演劇表現を探究している。



◆仙石桂子

新潟市出身。修士(教育学)。2006年より一橋大学学生相談室職員として学生支援に携わり、2010年よりタイ・シラチャ日本人学校国語科専任教諭を務める。2012年より四国学院大学社会学部身体表現と舞台芸術メジャー教授。専門はインプロ(即興演劇)で、同大学が推進するドラマエデュケーションの実践・研究に取り組み、教員研修、美術館、社会福祉施設など学内外の多様な現場でワークショップを展開してきた。2014年以降は劇作・演出も手がけ、市民・学生・俳優との協働による舞台創作を継続。「即興演劇シリーズ」「劇団オムツかぶれ」を主宰し、地域に根ざした演劇活動を通して、舞台芸術の新たな可能性を切り拓いている。



◆千田豊実

さぬき市出身。美術作家 / Senda Atelier主宰

多摩美術大学美術学部卒業後、東京とベルリンを拠点に制作発表を行い、多数の展覧会に出展。2009年に帰郷し、シベリア抑留体験を絵にしてきた祖父 川田一との二人展を企画。「日常の自然の移り変わりや繊細に流れ動く人の感情」をテーマに、見えない時間が流れているような現象的な空間を絵画やインスタレーションで表現している。祖父 川田が他界した2012年からは、抑留経験者への取材や関連資料などを参考に、「シベリアシリーズ」の制作を続け、ライフワークにしている。

HP <https://sendatoyomi.com> Instagram @toyomi_senda